

連載再開と COVID-19 パンデミック

西村秀一

独立行政法人国立病院機構仙台医療センター臨床研究部ウイルスセンター長

はじめに

前号の連載者交替を告げる原稿を送って、これでお役目は終わったとホッとしていると、とんでもないことが起きてしまった。昨年11月に ProMed を眺めていて、中国で怪しげな肺炎のアウトブレイクが起きていたことは気になっていた。それが武漢での大きな流行となりそれまでになかったコロナウイルスが原因ウイルスとして同定され、そして武漢が都市閉鎖され、この感染症(後に COVID-19 と命名)はパンデミックとして世界中で猛威を振るっている。本稿を書いている4月中旬までに莫大な数の感染とそれに伴う莫大な数にのぼる重症化した患者と死亡者が出ている。この新たな COVID-19 パンデミックが実際に起

きてしまっている状況下で、あえて新型インフルエンザに対するプランニングの連載を続けていくことは優先順位としては低い。予定外のことではあるが、形を変えて意義あるパンデミック対策を目指した連載にしていかがるを得ない。その第一歩としての原稿を依頼されたので、何を書こうか苦しみつつ私見を述べる。

1 新型インフルエンザに対する パンデミックプランニングと COVID-19 パンデミック

これまで15年にわたって私たちは「パンデミックプランニング」の重要性を唱え、この連載を続けてきた。が、それはインフルエンザのパンデミックを念頭にしたものであった。そこでは

地域の行政や医療の在り方を模索しつつも、対抗手段としてのワクチンや抗ウイルス薬や簡易診断キットといった実際に使える武器があることが前提であり、それらの資源をどのようにうまく活用するかに多くを割いていた。しかるに、今度のパンデミックでの戦いの相手に対しては、それらが全くない。これは、世界的にとつともなく多くの犠牲者を出した約100年前のインフルエンザ・パンデミックのときと基本的に同じである。そしてまた、それらのパンデミックで起きているさまざまなこと…医療の逼迫をはじめ、たとえば、人間模様を見れば、人々のために献身的に働く人たちがいれば、他人を非難したり差別したりする人たちやこのパンデミックを自分たちにとっての好機と捉える人たちもいて、また一方でパ